島崎藤村集(二)

日本文学全集　9

筑摩書房

日本文学全集9　島崎藤村集㈡

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　島崎藤村

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

島崎藤村集(二)　目次

春　五
家　一五九
嵐　四一六
年譜　四六〇
人と文学　山室静　四六七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

島崎藤村集

(二)

深夜座南軒明月照吾膝

春

一

「岸本君、七月二十二日に東海道の吉原まで来給へ。其日を期して東西から富士のもとに会することゝしやう。君の都合もあらうと思ふから為替で旅費を送る。」斯ういふ意味の手紙が東京に居る友達から行つたので、いよ〳〵岸本も西の方の旅から帰つて来るといふ報知があつた。東京の友達はそこで新橋を発つ。一行三人、青木、市川、菅――岡見兄弟は都合があつて加はらなかつた。

連中が東海道を下つた頃は明治二十六年の夏である。大分其日の汽車は込んだ。一行は疲れて吉原の宿に着いた。

会合の場所は街道筋によくある普通の旅人宿である。二階建の離座敷があつて富士は好く見えた。三人が占領したのは其二階の一室で、離座敷の方には他に泊客も無い様子。時々顔を出す四十恰好の家婦より外に放肆な雑談を妨げるものが無かつた。結句気楽な宿である。汚れた畳の上に寝転び乍ら、三人は岸本の来るのを待つて居た。

「最早見えさうなものだなあ。」

と言つて青木は身を起した。

青木は痩ぎすな方で、新しい紺飛白の単衣を着て、兵児帯を無造作に巻付けて居る。寛げた懐からは白い夏シャツがあらはれて居て、その紐釦の外れたところに、すこし胸の肌が見える。この男の物を視る眼付、迫つた眉、蒼ざめた頬、それから雄々しい傲慢な額なぞの表情は、傷つけ破らざれば休まずとでも言つたやうな、非常に過敏な神経質を示して居た。懺悔するやうな口元には何となく人の心を牽引けるところが有つた。それを見ると、世の中の惑溺や汚穢を嘗め知つた人の口唇を思ひ出させる。そこから力の籠つた声が出る。

「岸本君も困るでせうね。」と青木は市川の方を見て、「是から将来奈何する積なんでせう。」

「さあ。」市川も身を起した。

「さう何時迄も岡見君の世話に成つては居られないだらうし。」

「実は僕も其を心配して居るんです。」と言つて市川は青木の顔を眺めた。

市川は高等学校の制服を着けて居る。薄鼠色の夏の上衣に包まれた優雅な体格、短く黒い髪、蒼白く広い額、鷹の嘴を見るやうな隆い立派な鼻――すべて彼の風貌に顕れたところは、東京の下町で堅気な家庭に育つた人であるといふことを思はせる。彼の細い柔輭な眼は、大人のやうな思慮を表して居て、若輩ながらに世上の人を睨むと言つた

やうな風があつた。三人の中で、斯の男が一番年少である。

青木は粗末な煙草入を取出して、鉈豆煙管でスパ〳〵やつて、

「しかし面白い変化さねえ、岸本君が家を飛出すなぞは。」斯う言出した。

「どうして彼の男が旅に出る時の勢は凄じいものでしたよ。」と市川は友達が出奔の当時を想ひ浮べるやうな眼付をした。「麵麭は天にあり、てなことを言つて——」

「はゝゝゝゝ。」

青木は嘲るやうな声を出して笑つた。

斯ういふ談話の間、菅は横に成つたまゝ身動きもせずに居る。

「菅君は可羨しいねえ。」と青木は考へ深い眼付をしながら、「実に菅君は平和だ。」

「先刻から寝つゞけぢやないか。」と市川も笑ふ。

「僕は眠つて居やしないよ。」と菅も笑出した。「斯うして、君等の談話を聞いて居るんサ。」

二

菅は寝返りを打つやうにぐるりと身を返して、軈て俯臥のまゝ頬杖を突いた。彼は寝乍ら謹聴といふ態度を執つた。心の好いこと無類といふ斯の青年の眼には哲学者のやうな沈静がある。彼はまた年に似合はず毛深い方で、腮の辺なぞは奇麗に剃立てゝ居るが、濃く厚い鬚の痕は青々と人の眼についた。連中で彼を好かないものは無い。彼は年寄にも子供にも好かれさうな性質である。

其時、市川は嘆息して、「実は僕も、もうすこしで岸本君の後を追ふところだつたのです。」

「君も左様いふ気に成つたかねえ。」と青木は同情のある語気で言つた。

「なにしろ僕のところなぞは事情の多い家庭で、姉と養子の折合は好くないし。」と市川は言ひかけて、暫時対手の顔を眺めて、

「姉は又、何事も知らないものですから、一図に僕を頼りにしてるんです。僕が旅にでも出て了はうものなら、後は奈何なるか知れない。今一歩——といふところで、僕は考へました。」

「そこで考へるのが至当だね。」

「岸本君の行き方は左様ぢや無い。彼の男が考へる時分には、最早一歩踏み出して了つてる。」

「そんなら見給へ。」と青木は力を入れた。「岸本君のやうに破つて出やうとしたところで——畢竟奈何なる。そこが悲しいところさネ。束縛といふ執念深い奴は何処迄も人間に随いて廻るよ。」

市川は胸を突出して、「兎に角、危険い芸を演つたものだ。」

「はゝゝゝゝ。」と青木は苛刻い声で笑ひ出した。旅の友達の為に哭く心と、局促とした自分の身を嘲る心と、斯の

二つが今彼の胸には一緒に成つて居る。
「流石の岸本君も弱つて来るだらうなあ。」と市川が言つた。「行くところまで行つて見なければ承知しないといふ男だ。」
「彼の男は昔から彼様いふ風でした。」と菅も寝乍ら腮を突出す。
青木は癖のやうに頭を振つて、「僕に言はせると、あまりに先生は熱し過ぎる。熱するのは面白いが、馬車馬ではツマらん。」
「馬車馬！」市川は横手を打つた。
「彼様固くなつて了つても困りものだ。」と青木は笑ひ乍ら、二人の対手の顔を見比べて、「奈何でせう、君、彼様いふ男には少許酒でも飲ませて見たら。はゝゝゝ。」
「酒を飲ませるか――こいつは面白からう。」と菅は笑ひ乍ら身を起す。
「菅君が斯ういふことを言出すからねえ。」と市川も一緒に成つて笑つた。
不図物の音がした。
市川はそれを聞きつけて、耳を澄して居たが、人が来たのでも何でも無いと解つた時は、菅と顔を見合せて笑つた。待つても、待つても、岸本は見えなかつた。
「君、君、」と青木は待ち倦んで、「斯うして居たつても仕様がない。すこし其辺を散歩いて来やうぢやないか。」
軈て三人は連立つて二階の梯子を降りて行つた。

三十分許り経つて、斯の宿へ来て草鞋を脱いだ一人の青年がある。久留米飛白の単衣に角帯を巻付け、夏帽子、脚袢、尻端折といふ風体で、肩へ掛けるやうにした風呂敷包二つ、他には大和の檜木笠も携へて来た――で斯の男が岸本だ。彼は二階へ案内され、そこで脚袢の紐を解いた。さあ、友達は容易に帰つて来ない。青木や市川やそれから菅の置いて行つたもの、洋傘だの、手拭だの、其他手荷物の類が室内に散乱つて居る。急に熱い涙が岸本の頬を伝つて流れて来た。彼は自分の汗臭い風呂敷包に顔を押宛て、激しく泣いた。

三

「彼程苦労して来乍ら、斯ういふ光沢で居るんだからねえ。」と市川は意味有りげなことを言つて、久しく逢はなかつた岸本の顔を眺めた。散歩に出掛けた三人は宿へ引返して旅の友達を取囲いたのである。
紅く泣腫れた岸本の頬は先づ三人の心を動かした。彼の粗く剛い髪、大きな鼻、体軀の割合に幅の広い肩なぞは、寒い山国の生れといふことを示して居る。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時に愚図々々した――斯ういふ憐む可き性質は、彼の容貌を沈欝にして見せるのであらう。彼と、菅とは、同窓の友であつた。
「旅費まで送つて貰つて済まなかつたね。」と岸本はかし

こまつたやうに坐り直した。彼は難有いといふ面持で、可懐しい友達の前に手を突いた。菅は気の毒さうに、「あれは青木君から、君の方へ送つたんです。」

「恐しく物堅いねえ。」と青木は笑つた。「まあそんなことは奈何でも可いさ。」

長い旅の話が始まつた。三人の友達は熱心に岸本の顔を熟視つた。家を出、職業を捨て、友達と離れて、半歳の余も諸国を流浪して来たといふことは、岸本が精神の内部をよく説明して居た。夫ほど彼は動揺して居た。彼が漂泊したところは東海道から西の方であつたが、斯うして富士山麓の宿屋に会合して、連中に一五一什を物語る、それを考へて見たばかりでも、彼は夢のやうな心地がしたのである。よく彼は途中で倒れなかつた。熱田から便船で四日市へ渡る、亀山といふところに一晩泊る、それから伊賀近江の国境を歩いたが、其間には種々な寂しい悲しい旅の思を経験した。彼は黒ずんだ琵琶湖の水を眺めた。西京の旧い都も見た。須磨の海岸には暫時逗留して居たこともあつた。彼は又、伊予行の汽船に乗つた。それは旧友の足立を訪ねる為であつた。そればかりではない、彼は大和の方へも一月余の旅をして、吉野の宿で岡見の兄に邂逅つた。

琵琶湖に近い茶丈の生活はまだ岸本の眼にあつた。彼が西京から湖水の畔へ引返して、それから斯の吉原へやつて来る迄、二月半ばかりの間は茶丈を一間借りて居た。其頃は自炊だ。終には小炉を煽ぐのも面倒臭くなつて、三度三度煮豆で飯を喰つたこともあつた。亭主といふは大工が本職で、傍寺へ納める花を作つたし、内儀は内職に螢の籠を張る、子息は大津の下駄屋へ奉公して居る、斯様な人達と岸本はしばらく同じ屋根の下に暮した。そのうちに、蛙が鳴出す、螢が飛んで来る、蚊に責められるのが苦いから彼は自分で紙帳を張つて、裾へは古銭を飯粒で貼付けて、渋団扇でバタ〳〵風を入れては其内へ入つて寝た。「ソラ、また始まつた。」と家の人達が聞きつけてクス〳〵笑つたものであつた。内儀はよく時の惣菜などを皿に盛つて持つて来て呉れた。ある晩、亭主が大津の方へ行つた留守に、紙帳の外で、「岸本さん、岸本さん、」と呼ぶ声がする。岸本は黙つて震へて居たが、それから急に可恐しくなつて、丁度友達から為替が来たのを幸、逃げるやうにして江州の宿を発つたのである。尤も是事だけは三人の前で話さなかつた。

「憐む可き巡礼だ。」

と青木は心に繰返して居た。

四

間もなく飲食する物がそこへ持運ばれた。久しぶりの会合といふので、互ひに酒を酌みかはした。楽しい、放肆な、人の心を浮々させるやうな飲料は、結ぼれて解けない岸本の胸をも流れたのである。

「菅君はいけないんですか。」と青木は盃を差して、「すこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しやり給へな。」
「いえ、駄目です。」と菅は手持無沙汰に見えた。「僕は奈良漬に酔ふ方の口なんですから。」
「全く菅君はやりません。」と岸本は弁護するやうに言つた。「さう〳〵、菅君と一緒に高輪の蕎麦屋で飲んだことがあつた。彼の時は君、ホラ、二人で五勺誂へたつけね。」
「五勺誂へるやつが有るもんか。」と青木は笑ふ。
岸本は菅と顔を見合せた。菅は笑つて舌を出して見せた。
「市川君はいけさうだ。」と青木は銚子を持添へて勧めて、
「まあ、もう少しやり給へ。」
「僕は蒼くなる方です。」と市川は両手で頬を押へて見る。
「蒼くなるのは強いんださうだ。」と菅が物を頬張り乍ら言つた。
「一体、市川君は何歳でしたツけ。」と青木は何か思出したやうに、「僕は未だ君の年齢をよく知らない。」
「僕ですか。」と市川は笑つて、「僕は二十一でさ——たしか岸本君は明治五年でしたね、僕は六年だ。」
「左様かなあ、皆な未だ若いんだなあ。」と言つて、青木は菅の方を見て、「菅君は寧ろ僕の方に近いでせう——どうも其鬚の様子では。」
「えゝ。」と菅は笑ひ乍ら、青々とした腮の辺を撫でた。
其時市川は眼鏡越に岸本の様子を眺めて居たが、妙に意味有りげな微笑を浮べた。自分の膳の上にあつた盃をグツと一息に乾して、それを差し乍ら、
「岸本君の為に西京の健康を祝す。」
と乙なことを言ひ出した。急に岸本は紅くなつた。
「西京といふ人の噂がよく出たツけなあ。」と菅も微笑み乍ら。
「是の男もなか〳〵罪の深い方さ。」と市川は岸本の方を見て、軽く対手の膝を叩くやうな手付をした。「君、君、東京の方で心配してる人が有りますよ。」
と言はれて、岸本は余計に顔を紅くした。青木も菅も笑はずには居られなかつたのである。
軈て共同の事業の話が出た。彼等の中には早くから社会に出て働いて居るものも有るし、未だ親がゝりで学校へ通つて居るものも有るし、境遇は区々である。岡見兄弟の家といふは日本橋大伝馬町の鰹節問屋であつたから、一切の費用は其方で持出して、雑誌を出すことにしたのが其年の正月——丁度、連中の一人の岸本が旅に出たと同じ月であつた。
酔が廻るに随つて余計に遠慮が無くなつて来る。岸本が旅で書いた稿の中にある笑ふ可き文句の真似なぞが始まる。菅や市川は盛んに其をやり出した。「馬車馬」といふ言葉も幾度か繰返された。眼の両側へ手を宛行つて、鼻息ばかり荒く駆出して行く獣の光景なぞを見せつけられるので、岸本はもうショゲ返つて了つた。青木は又、聞いて貰ふ積で、自分の書きかけの草稿を風呂敷包の中から取出して読んだ。

それは元禄の大家が明治の代に復活つた頃である。外国の文学も次第に入つて来た。

英吉利の詩歌――殊にシェクスピアの戯曲は青年の間に読まれた。よく連中の話頭にも上る。

其日も、青木は「ハムレット」の悲劇を持出した。彼は横浜で西洋の俳優が演じたのを見たといふ。その舞台面の話から始めて、ハムレットに扮した男の身振手真似までやり出した。さあ、他の友達は眼を瞠る。中には口をモガモガさせて物を食ひ乍ら彼の方を観て居るものもある。力の籠つた青木の声は彼の名高い独語を暗誦するに適して居た。彼は西洋人の寝言を借用して、実は自分の胸の底に蟠る言難い思を伝へやうとするらしかつた。其時、胸を躍らせたは岸本で、青木の言ふことが一々思ひ当る。岸本は斯の友達に導かれて、今迄自分が考へて居たよりは、更に深く狂皇子の悲壮な精神を感得したやうな気もした。青木に言はせると、ハムレットは最も悲しい夢を見た人間の一人である。斯の最も悲しい夢を見たといふ言葉が、妙に岸本の胸に響いた。青木は科白を遣つて居るのか、自分を白状して居るのか、解らなかつた。彼の眼――狂熱の光を帯びた彼の眼は燃え輝いた。彼は冷くなつた酒を飲んで、歔欷くやうに笑つた。

菅は足を投出し乍ら見て居る。

ハムレットを見せた青木は更にオフェリヤを見せると言出した。彼は酔つて起ち上つた。花束のかはりに白い帕子を振つて、清しい声で歌ひ出したのは彼の可憐な娘の歌である。

"How should I your true love know
From another one?
By his cockle hat and staff,
And his sandal shoon.

He is dead and gone, lady,
He is dead and gone;
At his head a green grass turf,
And his heals a stone.

White his shroud as the mountain snow,
Larded with sweet flowers;
Which bewept to the grave did go,
With true love showers."

右訳歌

「いづれを君が恋人と
わきて知るべきすべやある。
貝の冠と、つく杖と、

はける靴とぞしるしなる。

かれは死にけり、我ひめよ、
かれはよみぢへ立ちにけり。
かしらの方の苔を見よ。
あしの方には石立てり。

柩をおほふきぬの色は
高ねの花と見まがひぬ。
涙やどせる花の環は
ぬれたるまゝに葬りぬ。」

（「おもかげ」の訳より）

友達仲間で斯の歌を愛誦しないものは無い。彼等は斯の歌を口吟む毎に、若々しい思想が胸の底に湧き上るのを覚えた。市川も岸本も酒の香に酔つて、青木の歌に調子を合せた。

「菅君。」

斯う言ひ乍ら、市川は沈着いた友達の手を握つた。彼は菅の顔を眺めて、楽しさうに身体を動つて、軈て笑出した。

「清さんは伝馬町ですか。」と岸本は思出したやうに、市川の方へ向いて尋ねた。岡見兄弟を区別する為に、弟の方は清之助の名を呼ぶことにして居る。

市川は点頭いて見せた。

「岡見君は――」

「大磯の方でせう、暫時僕も逢ひませんが。」と市川は答へた。

其時青木は、三人の若い友達が睦まじさうに語り合ふ有様を眺め乍ら、残りの酒をやつて居た。連中で細君のあるものは青木一人である。彼は早く結婚した。二歳になる女の児の親でありながら、漸く二十六にしか成らない。尤も、年齢の順から言ふと、岡見の兄が一番年長者で、斯人はやがて三十近かつた。例の心やすだてから、岡見翁などゝ戯れに呼んだものであつたが、その翁ですら未だ独身者で居る位で、他の連中と来てはいづれも世帯持の苦労なぞを知らない時代にある。青木は今更のやうに、若い友達と、妻子のある自分と、その生涯の相違を引比べて見た。

「オヤ。」と市川が言出した。「岸本君は煙草を喫み出したね。」

岸本は近頃喫むことを覚えたといふ風で、洋銀の鉈豆烟管でスパ〳〵やつて見せた。

「大分手付が好いぜ。」と菅は笑つて見て居る。

「これでも君、余程上手に成つたんだよ。」と岸本は煙を吹いて見せて、「旅に出ると種々なことを覚えるね。どうも手付が可笑しいなんて、西京では笑はれた。」

「ヨウ〳〵。」

市川は手を打つて笑つた。

其晩は斯ういふ談話で持切つた。彼等は七月の夜の明け

るのも知らない位であつた。

六

翌々日の朝、四人は箱根へ向けて吉原の宿を発つた。各自おもしろい風俗をして居たが、就中青木は尻端折で、毛脛を出して、紺足袋草鞋穿、それに岸本が大和から持つて来たといふ檜木笠を借りて冠つた。途次盛んな笑声が四人の間に起つた。沼津から三島までは乗合馬車がある。戯れに青木は鞭を執つて馬を駆りながら出掛けた。其辺は岸本が旅のはじめに歩いて通つた道路である。蠅の群は来てうるさく皆なの衣服に取着いた。

三島から山へかゝつて、午後の三時過には一同元箱根の宿にあつた。一夏箱根に夏期学校のあつたことがある。其時分、菅と岸本とは斯の宿に泊つて居たので、老婦とも心易い。其日も直に湖水に面した座敷を二間明けて貸して呉れた。粗末ながらも褞袍を出して、風呂を焚いて、夜具蒲団一切で、一晩三十銭づゝの約束とは、諸色の安い頃である。

山の上は冷しかつた。木の葉の混つた山家らしい風呂を浴びた後、旅慣ない市川は痛さうな顔付をして、水膿れのした足の肉刺を苦にして居る。

菅は看て取つて、「君、煙草の脂を埏つて貼ると好いよ。」

「ナニ、そんなことをしないでも、切つて水を出すのが一番だ。」と岸本が言ふ。

「咎めやしないかナ。」と市川は顔を顰めながら。

「大丈夫、まあ僕に行らして見給へ。」

と岸本は小刀を取出す。市川は両足を友達の前へ投出して、

「どうしても違ふなあ、そこは経験が有るからね。」と言つて笑つた。

何となく部屋の内は湿気臭かつた。屋根の上の方では、しきりに鶯や郭公の啼く声が聞えた。四人は胡座をかく、寝る、思ひ思ひにやつて、空想を誘ふやうな鳥の歌に耳を嬲らせて居た。急に市川は横手を打つた。彼は何かめづらしい事実でも発見したかのやうに叫んだ。

「確かに細君以上だ。」

斯う言出した。

「よく君は人を喫驚させる。」と言はぬばかりに菅は振向いて見る。

「菅君。菅君。」と市川は岸本の方へ指さしながら、「この着物は西京が縫つて呉れたんだとサ。」

「へえ。」と菅は面白半分に。

岸本は苦い顔をした。「市川君、左様君のやうに言ふから困る。実際僕は西京の世話に成つたよ、着物の事から、何から——一切。」と彼は妙に生真面目な調子で。「僕も君、旅に出て他に頼る人が無かつたもんですから、其れを西京も気の毒に思つて呉れたんでせう。」

連中の談話に土地の名が出る時は、必と何か謂があつた。

是は仲間内の符牒のやうなものである。

「まあ、左様弁解しないでも可いさ。」と言つて市川は岸本の顔を眺めたが、軈て同情のある語気で、「真実なんですか、西京が君に懐剣を贈つたとか言ふのは。」

「えゝ。」岸本の顔は紅くなる。

「如何いふ積りで彼様いふ物を君に贈つたのか、其を西京に聞いて見たいツつて、しきりに岡見君が左様言つて居ましたツけ。」

「あれは母親さんの形見なんださうです。」

「形見？」今更のやうに市川は事の真相を看破したらしく点頭いた。「しかし、君も非常な難局に立つたものさ。」

岸本は黙つて爪を嚙んで居る。

「まあ、聞きたまへ。」と市川は言葉を続けた。「あれから岡見君が盛岡を呼寄せて、何何か貴方も心を決しなければ成りますまい、実は岸本君はこれ〳〵です、と言つて聞かせたといふ話サ。」

例の符牒が復出て来た。

「すると、盛岡が対手の名前を聞きますから、」と市川は手真似をして見せて、「それは貴方が日頃姉さんのやうに思つてる人です、と言つたんださうです。西京と聞いた時は、流石の盛岡も柳眉を逆立てたといふ話でしたツけ。」

急に若々しい血潮が岸本の頬に上つた。其時高い笑声が青木と菅の間に起つた。市川も二人と顔を見合せて笑つた。

「ですから、」と岸本は言ひかけて、困つたやうな顔をして居たが、軈て決心の籠つた調子で、「僕は盛岡に逢つて見る積です。逢つて何もかも話す積です。その積で今度出掛けて来ました。」

「青木君、」と市川は振向いて言つた。「奈何いふことに成るでせう、是方が盛岡に逢つて見るとしたら。」

「盛岡かい？」と青木は戯語のやうに、「そりやあ君、岸本君でなくツちやあならないと言ふに極つてるサ。」

「ヒヤ〳〵。」市川は笑ひ転げた。

七

青木は瞑想的な眼付をしながら、若い友達の談語に耳を傾けた。彼が今、背負つて居る重荷は、群つて集つて他から無理に背負はせられたやうなものではない。彼の早い結婚は決して強られた儀式ではなかつた。細君の操を迎へるに就いては、両親は寧ろ反対した位である。操は実に彼の恋女房である。二人が耶蘇の会堂へ急いで、そこで結婚の式を挙げる前、いかに相思の情の濃やかであつたかといふことは、斯う青木が白状して居るので知れる。

「もし我が彼女に会はぬ前の事を思へば、侘しげなる野中の松に風の当り易きがごとく、世の事物に感触すること多かりし。彼女の情を得たる後は、物として春の色を帯びざるはなく、自ら怪しみて霞の中に入りたるかと思はるゝ程に、苦く辛く面白からぬ物に隔たりて、甘く美しく優しき物にのみ近きぬ。肥太りたる駒にうち乗りて、春の野に遠

乗したる時、菜の花の朝日に照りかゞやきたる畦を過ぎて、緩々と流るゝ小河の岸に駒を立てたる心地は――此恋の真味なり。」

恋愛は剛愎な青木を泣かせた程の微妙な音楽であつた。此世に属いた物と言へば、名でも、富でも、栄花でも、一切希望を置かないと言つたやうな、一徹無垢な量見から、実世界の現象悉く仮偽であるとまで観じた程の少壮な青木ではあつたが、唯一つ彼の眼中に仮偽でないと見える物は恋愛であつた。彼のやうに恋愛の思想を重んじ、また其を憚らず発表したものも少からう。彼に言はせると、恋愛は人世の秘鑰である、恋愛あつて後に人世がある、恋愛を抽き去つた日には人生何の色も味も無い――

不思議なことには、恋愛が造作もなく彼の眼を眩ましたやうに、結婚はまた造作もなく彼の心を失望させた。彼は厭世詩人に就いて斯様なことを言つた。「そも〳〵彼等は社会の規律に遵ふこと能はざるものなり。社会を以て家となさゞるものなり。普通の快楽を以て快楽と認めざるものなり。彼等は繩墨の規矩を厭離するの思想こそあれ、人世に羈束せられんことは思ひも寄らぬところなり。婚姻が彼等をして一層社会を嫌厭せしめ、一層義務に背かしめ、一層不満を多からしむるもの、是を以てなり。」と言つたり、又、「あゝ不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高尚を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通弁となりて、其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで寝ての夢覚めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところと成るこそ、うたてけれ。」と言つたりしたのは、彼の心中を暴露したものである。

明らかに自分は恋の魅力に翻弄ばれて居たのだ。斯う考へて、暫時青木は茫然と三人の友達の様子を眺めたが、旅から帰つた岸本が唯其処に坐つて居るとは思はなかつた――彼は眼前に往時の自分を視るやうな気がした。

蘆の湖に面した方の障子が一枚明いて居て、其間から深く青い水が見える。冷々とした空気は部屋の内までも入つて来た。

八

「あゝ。」と市川は嘆息して、談話を続けた。「岸本君のやうな寂しい旅に出て、思ひがけない親切な人に邂逅して見給へ。彼様いふことに成るのは当然だ――菅君、まあ左様ぢやないか。」

「はゝゝゝゝ。」菅は冷静な門外漢といふ態度で居る。「こりやあ経験のある者でなければ解らないことだね。」

「どうも胡散臭いと思つたよ。」と市川は笑つて、「岸本君が大和から送つて寄した論文なぞは余程怪しかつた。」

「あれは、少々申訳の気味だね。」と菅が言つた。

「オイ、岸本。」と市川は友達を抱寄せるやうにして、「左様君は考へ込むから不可。苟くも何事か為やうといふ男児が女子の一人や二人位葬つたツて何だ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com